

## 畜産酪農懇談会第1回セミナー

主催:(公社)福島相双復興推進機構(官民合同チーム)

2018/06/19

### 1. 目的

- ・相双地域においては、震災前から畜産・酪農が農業の基幹的な地位を占めており、その再開が農業復興の重要課題であり、この地域では畜産農家同士の結びつきに加え、耕種農家の協力で循環型の農業／耕畜連携が行われてきたが震災で途切れたため回復が急務。
- ・したがって、地域農業の再開のためにも畜産・酪農の再生は不可欠であり、担い手には、飼料の確保・糞尿処理など様々な解決すべき共通する課題があり、課題を共有し、解決に向けて先進事例を互いに学び合うことなどが出来る、ネットワークの場として「畜産酪農懇談会」を構築し、本会の取組の一環として、当セミナーを開催。

### 2. 開催の概要

- ・肉用牛繁殖・肥育、酪農、中小家畜（山羊・羊）農家を中心に、被災地域の市町村、県、国などの関係機関、獣医師、マスコミ等、約70名が参加。
- ・当機構の営農再開グループ長より当機構の活動報告に始まり、当機構の萬田富治技術参与による基調講演、全国の先進経営事例紹介として県外からの事業者らによる講演、相双地域の畜産事業者等からの質疑応答・意見交換会で構成。
- ・終了後には、参加者と講師あるいは参加者同士で自由に交流できる時間を設定。

### 3. 講演概要

#### ◎相双機構（官民合同チーム）営農再開グループの活動報告

講演者:相双機構 営農再開グループ長 中東 一

- ・国、県、民間の3者により構成されており、原子力被災12市町村を主な活動エリアとして、農業者への個別訪問を基本とし、昨年12月までに、1,012者の農業者を訪問。
- ・訪問結果に基づき、個々に必要な支援を関係機関と共に実施。

## 〔セミナー抄録〕

- ・相双地域において畜産および耕畜連携が重要であることをデータ等から示し、「畜産酪農懇談会」の取組の必要性を強調。

### ◎基調講演:相双地域の畜産・耕畜連携の目指す姿

講演者:相双機構 技術参与 萬田 富治

- ・冒頭、相双地域の自立した畜産酪農経営の再生を支援することに着目している旨、強調。
- ・国内外の畜産情勢を踏まえて相双地域で再生すべき畜産酪農の基本的方向について解説。
- ・生産と消費を結ぶ、持続可能な畜産酪農の推進が必要。
- ・耕畜連携を基本とした県内外への供給が可能な素牛生産を当面の目標においたらどうか。
- ・除染済農地の保全的管理や獣害防止のため、低コスト・省力的な放牧技術の推進が有効。
- ・自然と命が循環する持続的な畜産の再生のためには、次世代以降まで続く取り組みが必要、そのために先導的な経営に学び、情報を共有し、自らが経営者として自立するためのネットワークづくりを支援したい。
- ・これらの取り組みは過疎化が進行する全国の中山間地農業の先導的な事例として貢献できると講演。

### ◎事例紹介:省力低コスト酪農経営と耕畜連携のための良質完熟堆肥生産

講演者:眞嶋牧場 眞嶋 雄二

- ・経営概要として現在の経営は、長男に継承し、次男と従業員2名の計4名で、ホルスタイン経産牛120頭/育成牛80頭/黒毛和牛子牛20頭を飼育し、六次化商品としてパン・チーズ作りにも取り組んでおり、そのためジャージー牛8頭飼育。
- ・栃木県那須塩原市青木に戦後最後の開拓者として入植、現在の模範的な低コスト・省力的、高収益酪農経営を確立、経営は後継者に委譲。
- ・入植当時から土・草・家畜の循環を重視、労力削減やコストを追求し、仲間や関係機関との連携のもとに経営に取り組んでいる。

## 〔セミナー抄録〕

- ・長年にわたって牧場を試験地に地元企業、研究機関の3者による共同研究に取り組み、大気汚染を防止し、安全な飼料作物を生産できる完熟堆肥が生産できる堆肥クレーンシステムを実用化。
- ・飼料調製作業から給餌までの酪農システムを構築、今年から自動搾乳システムを導入。
- ・ゼロからの出発で得た、経験が相双地域の畜産酪農の再生に少しでも参考になることがあればと講演。
- ・前述のような創意工夫により、ゆとりのある酪農経営を追求しており、ジャージー種を導入してチーズ作りを開始。烏骨鶏卵（餌は自給デントコーン子実など）、手作りチーズなどを材料とした、無添加のパンの直販に取り組んでいる。

### ◎事例紹介:ひと・ウシ・田んぼで町おこし！作業分担で農業の活性化～耕作放棄地は宝の山～

講演者：(株)益子農林 代表取締役 益子 光洋

- ・経営概要として、和牛繁殖 47 頭(内、育成牛 10 頭)、稲 WCS（ホールクroppサイレージ）18 町歩、ソバ 4 町歩、林業を営む複合経営で、自身と従業員 3 名での経営を行っている。
- ・(株)益子農林は、茨城県大子町にあり、大子町が抱える問題として、急速に少子高齢化・過疎化が進んでおり、和牛繁殖経営のみならず、農業全体に大きな影響を及ぼしており、経営耕地面積とほぼ同等の耕作放棄地を抱えている。
- ・そのため、耕作放棄地の防止・解消を目的に、(株)大子町アグリネットワークを設立し、また、牛を増頭していくために作業の軽減・合理化を目指すため、徹底した作業の分業化と CBS（キャトル・ブリーディング・ステーション：地域の農家から母牛を預かり管理する施設）を建設。
- ・(株)大子町アグリネットワークは、飼料用稲の耕畜連携組織として活動し、助成事業をフル活用し飼料用米を生産・引退を検討している農家や地域住民を取り込んで、各作業に価格を設定して分業をするなどし、「地域の土地はみんなで守る」をモットーに活動。
- ・牛の増頭に向けた取組として、超早期離乳の実施や、耕作放棄地を放牧場として活用した地域連携、CBS の建設をして、作業軽減・合理化に取り組んでいる。
- ・「作業が一つでも出来なくなったら終わりじゃなく、出来ないことは任せれば良い」と考え、現在の、地域の方が無理なく分業・協力しあえる取組を始め、「あきらめかけている所が多い中、頑張

## 〔セミナー抄録〕

る姿を見せることこそが、わが町の魅力に繋がると思う。」と言い、「ひと・ウシ・田んぼで町の魅力を発信し、みんなで頑張りましょう」と熱く講演。

### 4. 質疑応答 (Q&A) より

- ・超早期離乳を実践しているということだが、子牛に哺乳をさせる際に飲まない・下痢を起こすなどの影響は無いのか。

⇒哺乳は大丈夫。しっかりと飲む。初めは怖かったが周囲からのアドバイスを貰うことが出来たし下痢を起こす事も殆どなく、親に付けたままの場合は、親の発情期の度に乳質が変わり、下痢を起こし、子牛が死んでしまうことがあったが、一切無くなった。

- ・超早期離乳を実施している素牛の市場出荷時の体重などの状態はどのようなものか。

⇒まず、濃厚飼料はあまり与えずに胃袋作りに注力しており、DG (Daily Gain = 1日の増体量) は1 kg 程度になっている。市場へは、250~280 日程度で出荷するようにしている。

放牧の取組始めの頃は、DG は1 までとどかなかったが、強化哺育として、通常の離乳後の哺乳量が 600g のところを、900g を与えており、結果として親に付けている状況と差はあまり無い。

ミルク代は少し嵩むが、放牧をしているメリットとして、体が丈夫になり、風邪も引かず、最近はコクシジウム症にも掛かりにくくなった。

2 か月目で、1 kg 程度のスタータが食べられるようになれば、それなりに育つようになる。

### 5. 会場からの意見・要望より

- ・放牧試験をしているが、畦、土手の草を給餌させることが出来ずにいて、現在のところ問題の無い管理をしているが、今後本格的に再開をしていく上、また、再開を悩んでいる人にとって足枷となっている状況。
- ・復興期間を、現実・現状に即したものとして欲しい。
- ・営農再開に関する農地の基盤整備事業などが、全然進まないのので、進めて欲しい。
- ・牛に関する放射性物質の実証実験は行われているが、中小家畜の山羊なども実施をして欲しい。

## 〔セミナー抄録〕

- ・農家の女性は、外に出て仲間で集まる機会を持つには家族の了解をえなければいけないけれど、本日紹介の早期離乳のような楽な牛飼いの方法が実践できると女性達の力の入れ方がかわってくる。回転が速く楽しい牛飼い、仲間づくりを頑張っていこうと、仲間に勧めたい。
- ・生産者の皆さんはやりたいことが心にあっても、それがなかなか横に繋がっていかなかったり、一つの枠に収まらないなど難しいことと思うが、生産者と行政や関係者がまず話し合うところから何事も始まると思うので、こういう懇談の場を全国にもアピールして広げてほしい。

### 6. 意見交換を終えるにあたり・萬田技術参与、内藤座長コメント

(萬田技術参与)

- ・自立した畜産経営は生産現場で取り組むことで実現できます。本日紹介した地域をリードする優良な先進事例に学び、我が家の経営や地域の畜産の再生に生かしていく。このような取り組みを支援するのが合同チームです。「畜産酪農懇談会」は、市町村や県などの枠を越えて、日本畜産の将来を見据えながら、相双地域の畜産の再生を支援します。今回の第一回セミナーでは多くの課題があることがわかりました。今回の議論を踏まえてこれからも生産者のネットワークを大切にしながら具体的な課題を一つ一つ解決しながら取り組んでいくことが大切であると思います。

(内藤座長)

- ・復興の結果を出してゆくには、着地点とスケジュールを明確にして努力する事が必要で、その主人公は生産者。これまで、成功している生産者の方のお話を聞くと、必ずその方の傍らには相談できる人がいる。国、県、市町村、JA など畜産に携わる機関があるが、例えば、責任機関を明確にした上で、畜産に特化した特別支援チームなどを組んで集中的に相談や支援をすることはできないか。そうすれば、着実な成果に繋がると感じる。

### 7. アンケートより

- ・畜産に対する熱意の共有も含め有意義でした。
- ・役立たせていくには時間が掛かるとは思いますが、集落で話し合い、実行し、成果を目指したい。
- ・生の意見がお聞きすることが出来、大変参考になった。
- ・個々の話し合いだけでは知れない生産者の不安や不満を感じる事が出来たと思う。
- ・全国の先進経営事例紹介の話は、実務的な内容でわかり易かった。

## 〔セミナー抄録〕

- ・ 同じ考えで牛飼いを、自信を持ってやっている人の話を聞いて自信が付いたし、安心した。
- ・ 国や県など公共機関の助成制度のあり方を、もっと使用者側に寄り添ったものに見直して欲しい。
- ・ 畜産に係る経営リスクが分かる内容と、その対策についての紹介をして欲しい。
- ・ 少数でもっと中身の濃い勉強会を実施して欲しい。
- ・ 耕畜連携で成果の出ている地域の見学（がしたい）。
- ・ （本日の講演で紹介があった）現地の見学をしたい。
- ・ 現場を見ながら、お話ができればと思う。

